

ADVENTURERS on SURFACE

表層の
冒険者たち—2008



表層の冒険者たち

私が「表層の冒険」という言葉を使い始めてから、もう20年近く経つ。直接的には絵画のありように期待をこめての言葉だったが、今回「表層の冒険者たち」というとびきりの表現を用いるにあたって、あらためてこの言葉について若干の説明をしておきたい。

「表層」の対、あるいは反対語があるとすれば「深層」であろう。表層／深層の対立は、また、浅い／深い、表面的／深奥的、外面的／内面的、あるいは、表／裏、こちら／あちら、近さ／遠さ、といった概念の対立を呼びこみ、それらと同等の関係で並ぶと思われるかもしれない。そしてこれらの対語の後者のほうに価値があると。つまり、浅いよりは深いほうが、表面的であるよりは深奥的であるほうが、外面的であるよりは内面的であるほうが価値的であり、表よりは裏に、こちらよりはあちらに、近いところよりも遠くのほうに本当のもの、理想的なもの、真実のものが潜んでいる。そもそも「表面的」という言葉自体が、すでに価値的に貶めることにつながっている。

こうした事情と軌を一にして、芸術は内面的真実の表出であるといった考え方が自明のように通用している。「芸術は表現である」という一見否定しようのないテーゼは、この考え方に支えられている。そしてこの「内面的真実」は、また「個性」「個我」「自我」……つまりこのかけがえのない「私」という信仰に支えられているのだ。

だがよく考えてみよう。この「私」の「内面」や「深奥」に何が潜んでいるというのだろうか。肯定的否定的いずれであるにせよ、要するに「感情」であり「欲望」であろう。しかし、これらを表出することが「芸術」であるわけではない。赤ん坊がミルクを欲しがって泣くのも、人がキレて暴虐をはたらくのも、やはり「内面」の「感情」や「欲望」の表出であり表現なのだ。「私」の「内」や「奥」や「深み」に何かすばらしいものが潜んでいるわけではないし、仮にそれがどんなに肯定的な「感情」や「欲望」であるしても、それをそのまま「外」に、「表」に出すこと自体が芸術で

あるわけでもない。

ニーチェは、目に見えない奥に、内に、裏に、あるいは彼方に何か真実が、すばらしい理想が存在するという考え方を「背後世界論」と呼んだ。西洋の哲学思想を長きにわたって支配してきたこうした「背後世界論」と手を切ろうとしたのがニーチェであり、その彼が、「表面に、皺に、皮膚に敢然として踏みとどまること」というすばらしい言葉を残している。

私が「芸術」とりわけ「絵画」について「表層の冒険」というとき、つねに念頭にあるのはニーチェのこの驚くべき認識である。「深み」へ、「内部」へ、「内面」へ安易に逃げてはならない。それはしばしば美的、倫理的に使われる口実となってきた。「外」や「表」の醜さ、弱さ、だらしなさ、つまりは否定性を、「内」や「裏」や「奥」のすばらしさ、誠実さ、真実さといった肯定性で補償しようとするのである。そうした偽瞞ときっぱりと手を切って、「表面に、皺に、皮膚に敢然として踏みとどまること」、それが「表層の冒険」である。だが誤解してはならない。絵画における「表層」の強調は、かならずしも伝統的な遠近法ないし透視図法をア・プリオリに否定し、「奥行き」の表象を頭から否定することではない。またこれは「具象」を拒否し、「抽象」を良しとすることに直結するわけでもない。もとより伝統的な透視図法にも写実にも依拠して事足りるとするわけにはいかないとすれば、どうすればいいのか。

80年代バブルのはじけた頃から、この日本でおそらくはイタリアの3C、つまり、キア、クッキ、クレメンテ、あるいはある種のアメリカン・ポップの影響下に、発育不全の子供みtainな薄っぺらな表象を意図的に狙う傾向が顕在化した。

そしてまたもうひとつの傾向、漫画的表象の美術化ともいうべき現象が生じ、それが日本の漫画やアニメの水準の高さに助けられ、またそれと相乗効果をなして一

定の評価を得てきているらしい。だが、「国際的に」受けているとか高額で取引きされたとかされないということは私にはほとんどどうでもいいことで、これら二つの傾向が、60年代以降の「アート」群の跳梁の果てに行方を見失った現代美術がモダニズム的「抽象」への素朴な回帰を敬遠しながら選択するほかはなかった方途であったにせよ、そうした作品群が真に「表層の冒険」たりえているか否かこそが問題である。そして私にはどうしてもそうは思えないのである。

ビザンチン美術と同じように抽象美術もまったく同じ姿のままであると指弾したのは、イタリアの碩学マリオ・プラーツであった。ネクタイやスカートの図柄のような画面が芸術であるなどと称しているのを見ると、理性の限界が超えられてしまったと思わずにはいられないといつてのけたのである。これは直接にはアンフォルメルを指しての言葉だったが、しかしこの何ともきつい言葉は現在でもそのまま生きていると見なければなるまい。

「表層の冒険」——言うに易く行うは難し。「表層」そのものを創造し、そしてそれをかけがえのない「自我」として引き受けること。それが「画家」というものであろう。

表層の冒険者たち——出でよ！



谷川渥 TANIGAWA Atsushi

東京大学大学院博士課程修了。現在、國學院大学文学部教授。専攻美学芸術学。著書に、「形象と時間」、「美学の逆説」、「鏡と皮膚」、「文学の皮膚」、「廃墟の美学」、「図説だまし絵」、「美のパロキシム」、等。懸案の書物「シュルレアリスムのアメリカ」を近々みず書房より刊行予定。

Chiba.T
Danno.M
Enzo.Y

Haga.Y / Hagiwara.H
Ishii.H
Jinno.Y
Kijima.S / Kishimoto.Y / Komatsuzaki.H
Kozawa.M / Kudo.R / Kurahashi.T

Niyama.M / Ninomiya.J / Nishio.J / Numata.C
Oshima.A

Shiba.A

Uchikura.H

Yamabe.Y / Yamada.C



【表層の冒険者たち—2008】
発行：特定非営利活動法人・アート農園
〒333-0866 埼玉県川口市芝3879
TEL/FAX: 048-269-4965
http://www.art-nouen.jp
発行日：2008年10月13日
編集室：COAC現代芸術研究所
デザイン+DTP: cool and crazy co., ltd.
Cover Photo: NISHIO JUN
印刷・製本：マルチメディア デザイン株式会社
定価：700円[本体価格667円+税]



1 筆跡3 麻紙、顔料、染料、墨 91.0×72.7cm 2007



2 早春賦 和紙・金箔・墨・膠・金泥 140×340cm 2006



3 鏡の中の外 和紙、墨、アクリル、メディウム、胡粉 91×91cm 2008



4 植物の形相 HASU 07-2 アルキド樹脂絵具、顔料、綿布 90.9×116.7cm 2007

1

筆跡を目でなぞるとき、作者の所作が、観る人の身体に擬似的に浸透していく。筆跡は、形としてだけでなく、常に次の画へ、次の座標への方向性を孕み、次の座標への過程として在る。字を書き始めれば、紙面には天と地が出来て、天から地への力の働く空間、重力の働く空間となる。多方向から字画を描かれた紙面は、軌跡が互いに侵蝕し合い、切断されて纏れた時間の集積となる。空間は重力から解き放たれるだろうか。



千葉照子 CHIBA Teruko

1974 千葉県に生まれる、1998 多摩美術大学美術学部修了、「キリンコンテンポラリー・アワード 1998」奨励賞、「第3回アート公募'99」奨励賞、「第4回アート公募'00」画廊賞、ギャラリーゴトウにて個展、以後、青樺画廊、2000 ギャラリー 52、2007・08 ギャラリー四門などで個展、その他グループ展多数。

2

窓辺に座して内なる自然と外なる自然の声を聞く。梢を渡る風や朝霧、陽の光の粒子とたゆたう時、自分の中の何かが、感応しはじめる。川向こうの松林の景が違って来るのは、雨の降り出す前や日の出の頃。いくつものレイヤーで分けたように、くっきりとその松林が姿を現す。見え方や感じ方はその風土や空気の中で育まれた身体感覚であり、それを抜きにしては作品は成立しない。



団野雅子 DANNO Masako

1974 女子美術大学芸術学科卒業、1972-74 美学校 最終美術工房（松沢宥）にてコンセプチュアルアートを学ぶ、1975-78 言語による作品個展、1996-08 平面による作品個展、2000-04 ヘルリンにて個展、2002-06 山梨県立美術館とみんなで作る美術館「みなび」展を企画、2002-05 横浜国立大学非常勤講師、2007 山梨県立美術館ギャラリーエコー企画展、グループ展多数。

3

私たちは、エベレストにも登る傲慢さで地球を一周し、DNAを解析してもメビウスの輪からでられないことを知った。私たちは自らの傲慢さによってとじこめられたのだ。これこそまさに夢の世界、確かさの消失した世界だ。だからこそ現実に出会うために、その場所から夢と同じ構造の絵を描こう。それにしても、そうさせるもう一人の自分がある。彼はどこにいるのか。それでも痕跡はある。昔書いた意味不明なメモに。



山田宴三 ENZO Yamada

1957 静岡県生まれ、1987 多摩美術大学大学院美術研究科修了、1987 よりかねこ・アートG1にて個展、以後、マキイマサルファインアーツ、高島屋、不二画廊などで個展、その他グループ展多数、現在、アート農園理事。

4

色彩が重なり、交じり合うことで情景が生まれてきます。そして、それは、画面の中で水に映り、風にゆれる、光がさしこむ、HASUをとりまく景色と重なっていきます。色彩が奏でる重層された空間の中で、有機的な世界を表現しています。



羽賀洋子 HAGA Yoko

1986 創形美術学校造形科研究課程修了、1996 ホルベインスクールシップ 1997-99 昭和シェル石油現代美術賞展、1999-00 国際現代美術展「波動」(光州市立美術館)、2003 21世紀の現代美術と今(光州ビエンナーレ美術館)、2008 音・色・かたちのポリフォニー(スタジオSK)、その他グループ展多数。宇フォーラムKV21美術館('04)、アリカアートサイト('07)、ギャラリーなつか('08)、などで個展。



5 均衡のパラドクス キャンバスにアクリル・ネオカラー 2004



7 素晴らしいきかな漂白の時代
ミクストメディア (アクリル、蜜蝋、シルクスクリーン) 110×100cm 2007



6 浸潤 (08-Jun.) oil on canvas 162×261cm 2008



8 WORK NAME 材料名 00×00cm 0000

5

筆跡を目でなぞるとき、作者の所作が、観る人の身体に擬似的に浸透していく。筆跡は、形としてだけでなく、常に次の画へ、次の座標への方向性を孕み、次の座標への過程として在る。字を書き始めれば、紙面には天と地が出来て、天から地への力の働く空間、重力の働く空間となる。多方向から字画を描かれた紙面は、軌跡が互いに侵蝕し合い、切断されて纏れた時間の集積となる。空間は重力から解放されるだろうか。



萩原宏典 HAGIWARA Hironori

多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了、国内での個展、国内外での国際交流展を中心に作品を発表、2005 東京国立博物館、円山応挙館にて個展、パブリックコレクション：日本海洋資源開発公社、Warp&Woof 横浜、日野自動車シャノン 21、株田沼／東京、荏原製作所、Panasonic (松下データシステム) 他。現在、多摩美術大学、東京家政大学、東京デザイン専門学校非常勤講師。

6

子供の頃、故郷の高梁川の橋の上から、その清流を飽かず眺めた。真下に見える川底の石や水草はゆらゆらと揺らめきながらも、その位置を変えることはない。しかし膨大な水量は川上から川下へ絶えず移動し続けた。



石井博康 ISHII Hiroyasu

1977 東京芸術大学油画科修了、現代日本美術展、板橋の現代作家展、板橋 INSTALLATION〈花〉、いけばなコラボレーション、版概念〈過去・現在未来を採集する版画〉展、C・A・F展、日韓現代美術交流展、現代美術新世代展、それぞれの「…」展、日中友好交流展、Japan/Wisconsin Arts Exchange (WI, USA)、個展12回 (ギャラリー山口、フタバ画廊、色彩美術館、他)、現在、東北芸術工科大学教授。

7

テーゼ・アンチテーゼ
さしたる変わりはないじゃないか。
日常の中で魂の戦いをしているか？
毎日が非日常
日々は金魚
金魚のはく息はあわ…



神野八重子 JINNO Yaeko

1996 ギャラリー・イセヨシ (東京)、1997 ギャラリー・イセヨシ (東京)、1999 フタバ画廊 (東京)、2001 フタバ画廊 (東京)、2002 ギャラリー山口 (東京)、2004 ギャラリー山口 (東京)、2005 トキ・アートスペース (東京)、2007 トキ・アートスペース (東京)、2008 トキ・アートスペース (東京)、その他グループ展多数。

8

絵画とは一体なんだろうという問いかけから、絵画的なものを疑い、絵画的でないものを絵画へ持ち込むきっかけとなり、金属を作品に使うようになっていた。最近、最も気になっているのは、DM (案内状やハガキ) で、その形と色彩と、情報を与える機能性におもしろさを感じている。これまで捨てていたそれらを寄せ集め、組み合わせ、再構築した新たな作品として再生し輝きを与えられたらと考えている。



木嶋正吾 KIJIMA Shogo

1979,85,87,89,92-93 第14回現代日本美術展、1980 多摩美術大学大学院修了、1980,84,86,88,90 第13回日本国際美術展、1984-86 第48回新制作展 新作家賞受賞、1985-86 第19回文化庁現代美術選抜展、1991 ジャパンフェスティバル (イギリス、ロンドンバービカンセンター)、2006 作品交流展 (タイ、シルパコーン大学美術館) 他、現在 多摩美術大学教授。



9 正面に立つ 油彩、蜜蝋 194×130cm 2008



10 風景の中へ 06-4 oil on canvas 194×162cm 2006

9

ここ近年、ストライプの状の模様に惹かれることが多い。この特性を絵に活かさないかと模索するのだから、なかなか思った密度には至らない、ただ苦しい。本当に苦しいと思ったとき、一瞬「第2の扉」が開かれたような気になる。モチーフとして、またある種のシステムとして目的化された「ストライプ」ではなく、それを「梯子」として絵の中、また人間の中に降りていきたい。



岸本吉弘 KISHIMOTO Yoshihiro

1994 武蔵野美術大学大学院修了、1998 文化庁芸術インターンシップ研修員、2001 ロンドンにて滞在制作、現代日本美術展、VOCA展、越後妻有アートトリエンナーレ、多数出品、ギャラリーαM、ギャラリーカイトアロード画廊、かわさきIBM市民文化ギャラリー、西脇市岡之山美術館、個展多数、兵庫県芸術奨励賞、資生堂ADSP賞、神戸長田文化賞等を受賞、大原美術館や神戸大学等に作品収蔵。

10

生成はまた、崩壊、あるいは崩落のエネルギーを含み、絶えず動いて、固定した空間の形を見いだすことは難しい。二つのはざまの移行の中に現れる、一瞬の不安定な形、それが空間の存在を覚悟させてくれる瞬間でもある。

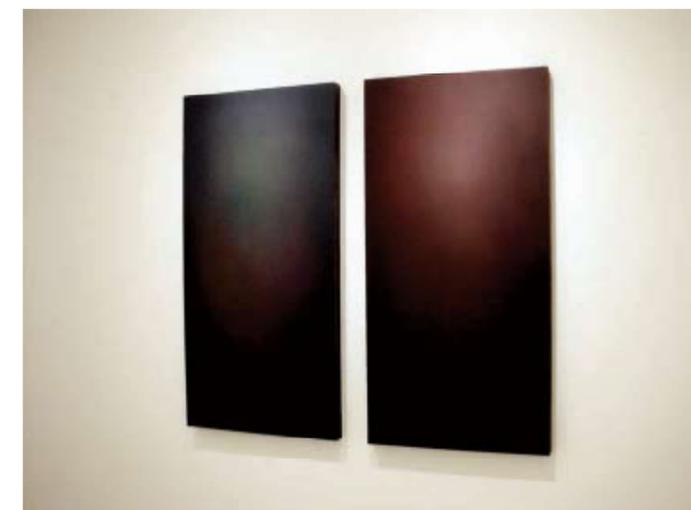


小松崎広子 KOMATSUZAKI Hiroko

1957 信州大学教育学部修了、1962-68 現代美術研究所（東京、新橋）にてキュビズムを学ぶ、1979-80 ニューヨークに在住、1997-99 多摩美術大学美術学部芸術学科非常勤講師、1978 第七画廊にて個展、以後、銀座絵画館、ギャラリー山口、トキ・アートスペース、コバヤシ画廊などで個展、その他グループ展多数、2002 都市芸術国際会議に参加、現在、アート農園理事。



11 現象としての静物 パネルに石膏地・アクリル 45.5×53.0cm 2006



12 UNTITLED 07-02A.B 油彩 90.5×45.5cm×2 2007

11

パリに滞在していた時、ノートルダム大聖堂を脇のカフェからぼんやりと眺めていた折に、事物が空間を刻むという感覚が強烈に湧いた。800年以上もその場を占めている聖堂が仮に崩壊しても、残像は空間に確実に刻まれるという思いである。人、建物、事物、通り過ぎた全ての像が空間には刻まれている。景色の裏側に無限に重なった無数の残像と共に、私たちはこの場に立ち会っているのである。



小澤基弘 KOZAWA Motohiro

1992 筑波大学大学院修了（芸術学博士）、1998-99 文化庁芸術家在外研修員（パリ国立高等美術学校）、安井賞展、現代日本美術展、風の芸術展、前田寛治大賞展、ドマーニ明日展等に出品、紀伊国屋画廊、あかね画廊、村松画廊等にて個展多数。現在、埼玉大学教育学部教授、西オレゴン大学客員教授、アート農園理事。

12

心を閉ざした若者の理不尽な犯罪や荒んだ大人の醜い行為を目の当たりにし、日々やるせない気持ちになる。せめて絵画ぐらいは深く詩的に語りかけ、なおかつ畏怖の念を感じさせるような存在でありたいと願うのだが、これは果たして今の社会に於いては的外れな思いなのだろうか…。

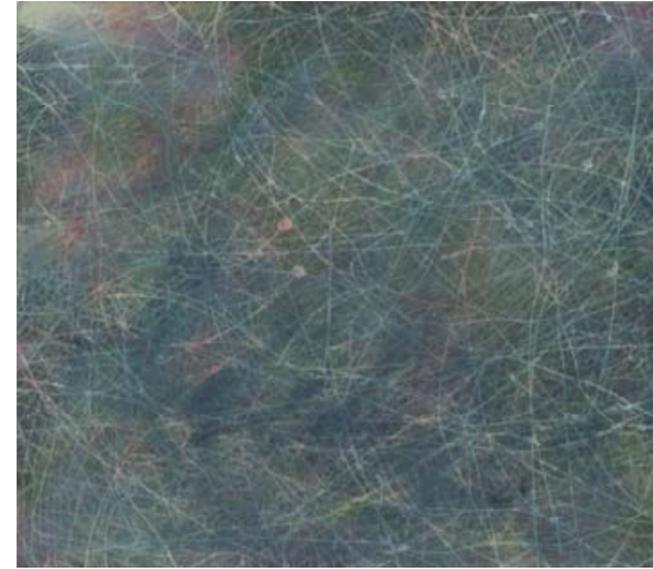


工藤礼二郎 KUDO Reijiro

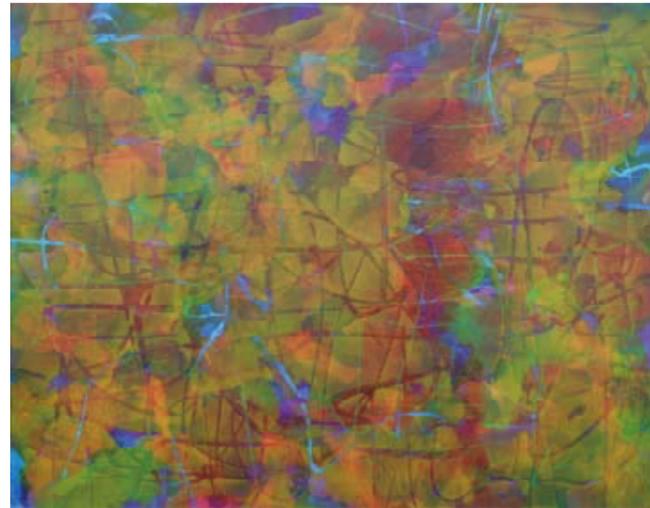
1991 創形美術学校研究科造形課程修了、1996-97 パリ国際芸術会館滞在、1992 G・ART GALLERYにて個展、以後、ギャラリー現、ギャラリーエアンドウなど、東京を中心にパリ、大阪にて個展、その他グループ展多数、現在、創形美術学校ファインアート科非常勤講師。



13 WibbleWobble-08SQ-nov 赤麻紙、白麻紙、WT紙、墨、アクリル、彩三水、岩絵の具、水干 91×86cm 2008



15 絡まり mixed media on canvas 530×455cm 2006



14 交差する視点 アクリル 91×116cm 2008



16 Hana-tama 麻紙、色鉛筆、サイアノタイプ 728×1030cm 2006

13

タイトルの WibbleWobble は英国で使われる遊び言葉です。Wobble(揺らめき)と言う単語はありますが Wibble という単語は存在しません。会話の中で Wobble を使う場合に Wibble をつけて「wibblewobble」と連続で言う習慣があるそうです。この遊び言葉の持つリズムミカルな響きは画面を飛び回る不思議な形態のイメージと関連し、紙に描かれた形態は光の透過と反射により、表れては消え重なり合いながら変化を続けていく。



倉橋利明 KURAHASHI Toshiaki

1984 多摩美術大学大学院修了、1985 コバヤシ画廊で個展以後モリスギャラリー、ギャラリーなつかなどで個展、その他グループ展(ニューヨーク、ベルリン、日本)多数、第16回現代日本美術展、第2回東山魁夷記念日経日本画大賞展、優秀美術作品として文化庁賞上、現在、神奈川大学附属中・高等学校教諭。

14

水たまりや窓ガラスのような、1つの平面を境に透過と反射が同時におきて作られる空間に興味がある。繋がっているようで異なる空間は、互いに浸透し合い曖昧な前後関係を作ってまた別の空間として立ち現れる。



新山光隆 NIYAMA Mitsutaka

1979 神奈川県生まれ、2001 拓殖大学工学部工業デザイン学科修了、中和ギャラリー(銀座)にて合同展、アート農園前身のMASCに参加、2002 小野画廊(京橋)にて個展、バン格拉ディッシュで開催の合同展出品(Aainul Gallery)、2005 個展(小野画廊・京橋)、2006 合同展(吉川英治記念館・青梅)、2008 個展(不二画廊・大阪)、現在アート農園理事。

15

それを退行であるというのであれば、言訳と採られてしまうかもしれませんが、自分のささやかな抵抗を記しておく必要があるのかもしれませんが。去勢のショックに唯立ち尽くしている訳ではないのです。色彩、展色材、更にそれらの彩色方法、これらの記号の並びのなかに、諸知覚作用の総合を図るなかで、虚の空間の現れを待つことを、私と共に体験していただければ幸いですと思っています。



二宮淳 NINOMIYA Jun

1991 多摩美術大学芸術学科修了、1996 ギャラリーなつか bpにて個展、以後、ギャラリー山口、ギャラリー檜などで個展、その他グループ展として、1988 饒舌なる余白(バレルゴンII)、1989 五鮮色魚(田村画廊)、2006 ART PROGRAM OME 2006(吉川英治記念館・東京)、2008 ARTFAIRX(ギャラリー檜)に参加。

16

「見ている」ということは、ふとしたときに別の感覚と交わることがある。何かを見ることでノイズがノイズと意識されず別の音に聞こえたり、存在しない音が聞こえたりするのと似ている。普段見ている世界は、カメラで視覚を強制的に固定されているが、サイアノタイプという日光プリントは自然の移り変わりによってその青色の濃淡を変えていく。そこには、人の無意識に溶けている情報の破壊・搾取・錯誤・虚偽が見える。



西尾順 NISHIO Jun

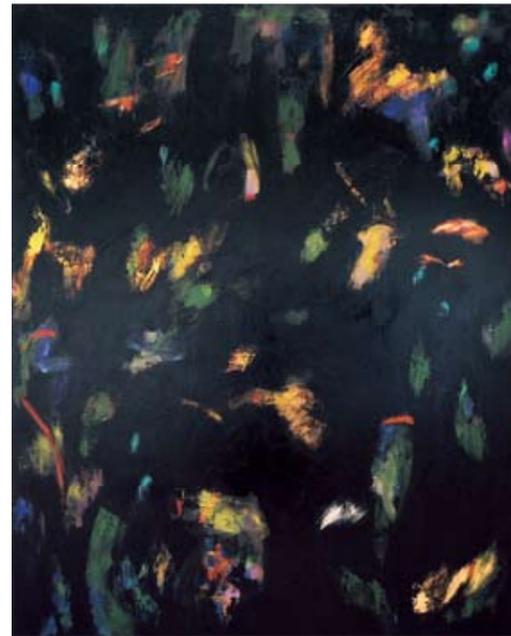
1997 国際ビジネス専門学校 マルチメディア科システムアドミニスト専攻修了、2006 東洋美術学校 視覚伝達デザイン科修了、2005 新宿、下北沢などで個展、グループ展(日本橋、銀座、青山)多数、2004-05 日本写真家協会展ヤングアイ賞(東京・京都・名古屋・北海道巡回)、2006 東洋美術学校制作修了展優秀賞、現在、株式会社クール・アンド・クレイジー 代表取締役。



17 内在する平面 キャンバス、アクリル、パステル 180×270cm 2006



19 MAO-3120408 キャンバスに油彩 22×27.5cm 2008



18 海へ-Black キャンバスに油彩・蜜蝋など 227.3×181.8cm 2006



輝く細胞 [手前の立体作品]
凹レンズ、FRP、鏡、馬革
22×19×17cm 2008

20 Lumiere [壁の白い作品] 紙 114×200cm 2008

17

樹木をモチーフに立体と平面を平衡して制作してきた、タイトルには、「アニマ(精霊)」、「ゲニウス・ロキ(場に宿る精霊)」、「内在する平面」等とつけて、風影の光と影の気配として存在する精神性の美を模索している。具体的にもものとして捉へようとするほど対象は放れていき、自覚しようとするほど突き抜けてしまう。「美とは内なるものでありながら圧倒的な他者である」というように捕え処のない気配と葛藤している。今私はその精霊(美)に憑りつかれているのかもしれない。



沼田直英 NUMATA Chokuei

1954 北海道生まれ、1978 東洋美術学校絵画研究所修了、1980-81 パリ留学、1979 棟画廊、ギャラリー K、ときわ画廊、フタバ画廊、ギャラリー GAN、などで個展、ホアン・ミロ ドローイング展(バルセロナ)、コンパレゾン(パリ)、ソウル・ノベンバー(ソウル)、キアスム展(銀座)、尾川国際アートフェスティバル(長野)、芝山アート展(成田)、国際野外の表現展(鳩山)等グループ展多数。

18

人間の能力は太古の昔からほとんど変わっていないのに、驚くべき世界の拡大と狭隘化は人々に強い乖離感覚を与えている。個々の身体から出発し、結局は個々の身体に帰着するしかない私たちにとって、身に不釣り合いな難問を日々突きつけられているのである。今、絵画とは、このような身に不釣り合いな難問に対する数少ない応答の一つではないかと考えている。



大嶋彰 OSHIMA Akira

1951 新潟県生まれ、1977 東京芸術大学大学院修了、1993 文化庁芸術家在外研修員(ペンシルヴェニア大学大学院客員芸術家)、1990 ギャラリーQにて個展、以後、創庫美術館(新潟)、ペンシルヴェニア大学(フィラデルフィア)、アートフロントギャラリー(東京)、などで個展、その他グループ展多数、現在、特定非営利法人アート農園理事、滋賀大学教授。

19

絵を描くという仕事、絵画という表現を選んで、或いは絵画に選ばれて30年が過ぎた。視覚の確信、その表層から滲みでてくる掴みどころのない未知のかたちを追いながら、筆をすすめてきた。淡々とした日々の制作のうちに幾ばくかの成果をみだしながらそれを次の作品へとつないでいく。画家はこの日々の営みに神経を注ぎながら未来を紡ぎだしていくのだ。様々な思考の断片を、消え入りそうな記憶の欠片を血肉としながら絵画の表面を彩るのだ。



芝章文 SHIBA Akifumi

1980 多摩美術大学大学院修了、1987 今日の作家(位相)展、1988 ニュージャパニーズスタイルペインティング(日本画材の可能性)展、1993 ヨコハマ現代美術展/横浜の波、1995 横浜市民ギャラリー30周年記念 第30回今日の作家展(洋上の宇宙)アジア太平洋の現代アート展、2004 個展「さまざまな眼139」、コバヤシ画廊、ARIKA ART SITEなどで個展、グループ展多数。現在、アート農園代表。

20

光は、受けるものだとばかり思っていました、それでもなさそうな気がします。そもそも光は、私たちの体内にも宿っているのではないか。我々の身体を構成している小さな小さな細胞にも光の粒は宿り、美しい光の諧調に出会ったとき、外からの光と身体に内在する光とが相互に呼応し振動する。ぞくぞくとするあの感覚。むずかしい感情の問題ではなく、物と物との反応のレベルの素朴なお話です。



内倉ひとみ UCHIKURA Hitomi

1956 鹿児島県に生まれる、1982 多摩美術大学大学院修了 日本画専攻、2003-04 パリに在住、1985 ハラ・アニュアル、1986 鎌倉画廊にて個展、以後、個展グループ展多数、近年はパリ、ベルリンで個展、グループ展に参加、2008 明治大学総合講座講師、現在、アート農園理事、リュミエール実行委員会代表。

[表層の冒険者たち — 2008] 開催によせて



21 風景画・奈義パノラマ アクリル、テンペラ 130.3×486.0cm 2008

NPO 法人アート農園が主催する MASC 都市芸術実際会議の勉強会も、はや7年を経過した、毎月1回の継続的な集まりは、様々な紆余曲折はあったものの、参加してきたひとりひとりにとってはそれなりの大きな成果をもたらしてきたように思う。

この度、絵画の周縁を研究し、その方途を模索するなかから、絵画に焦点を充てた展覧会を企画した。しかしながらこの企画はなんらかのイズムやエコールを標榜するものではない。制作を続けるという日常と非日常のなかで、淡々と描き続けられてきた営為を、個々の絵画活動の一端を紹介するものである。

絵画の終焉がささやかれて久しい今日、絵画について考えてみると、眼の快楽を超越し、抽象や具象といった

歴史的対立概念からも逃れ、言説喚起力を携えた絵画表現が数多く見受けられる。自由奔放な絵画表現が現れてきているのだ。元来、日本の絵には抽象など無かった。写実も無かった。あったのは愛でる自然を背景とした叙情的表現なのである。絵図から絵画に移行し、描くこと、観ることの原点に立ちかえり、本来あるべき絵のすがたを想起してみよう。

「表層の冒険者たち」と名付けられたこの展覧会に出品された作品群は紛れもなく現在の日本の絵画である。画家として生まれ、画家として生き、画家として死んでゆく。そんな個々の分身としての作品が放つエスプリに触れて頂きたい。

NPO 法人アート農園



22 fragile アクリル絵の具、アクリルメディウム、顔料、ポリエステルファブリック 132×160cm 2008

美術雑誌「ART FIELD」バックナンバー

■ 購入方法：ホームページにてお問い合わせください。 <http://www.art-nouen.jp/artfield.html>

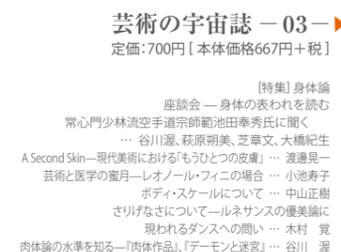
Back Number
 バックナンバー



◀ 芸術の宇宙誌 — 01 —
 定価：1000円 [本体価格952円+税] (在庫少)
 互助会制から後援会制へ … 松永 康
 当世美術館事情 … 谷 新
 MASC公開講座 … 芝 章文
 グランド・ゼロと建築 … 飯島洋一
 席巻の表象史 … 谷川 渥



◀ 芸術の宇宙誌 — 02 —
 定価：700円 [本体価格667円+税]
 [特集] 映像というメディア
 明滅運動と映像表現 … 萩原明美
 映画と絵画 … 谷川 渥



▶ 芸術の宇宙誌 — 03 —
 定価：700円 [本体価格667円+税]
 [特集] 身体論
 座談会 — 身体の変遷を語る
 常心門少林流空手道宗師範池田泰秀氏に聞く
 … 谷川渥、萩原明美、芝章文、大橋紀生
 A Second Skin—現代美術における「もうひとつの皮膚」… 渡邊晃一
 芸術と医学の蜜月—レオノール・フィニの場合… 小池寿子
 ボディスケールについて… 中山正樹
 さりげなざについて—ルネサンスの優美論に
 現れるダンスへの問い… 木村 寛
 肉体論の水準を知る—「肉体作品」、『デーモンと迷宮』… 谷川 渥



▶ 芸術の宇宙誌 — 04 —
 定価：700円 [本体価格667円+税]
 [特集] 戦後日本美術60年 1945-2005
 1970年—大阪万博とインターメディアの空白 … 暮沢剛巳
 「物語」をこえること … 千葉成夫
 回想のなかの1960年代美術 … 早見 堯
 戦後日本美術の自主的な文脈 … 中村英樹
 戦後アヴァンギャルド芸術私観 … 針生一郎

21

絵画材料や技法は美術史に結びつき、作品と美術史との関連を示唆します。近作の「風景画」は、美術のなかの風景と現実の風景が渾然一体となった私の記憶を発掘する試みでもあり、「風景画」を自然の描写としてではなく、人工的で音楽的なものとして成立させようとしてきました。一つの原理で「風景画」を成立させるのではなく、多様な原理の共存が「風景画」を生み出すような方法について考えました。



山部泰司 YAMABE Yasushi
 1958 岡山県生まれ、1983 京都市立芸術大学大学院美術研究科修了、1980～ 花をモチーフにした作品で注目を集める、2003～ 絵画の表面を純金箔で覆う「GOLD PAINTING」の連作、2007～ 記憶と人工性をテーマにした「風景画」のシリーズを始める、現在、いくつかの様式を並行して展開中。

22

半透明のポリエステルやナイロンの布地を支持体として制作している。裏から描いたり表から描いたりして形と余白を入れ替えたり、入れ替えなかったり。ツヤツヤとした光沢やくもったマットな肌。うっすらと透けて見える何かわからないもの。きらきらして形を惑わす光や影。見慣れた日常に突如乱入してくる調子の外れた色彩の一瞬。思い違いのようなその時の光景。長いような短いような。平面上の化学変化を見たいという欲望で。



山田ちさと YAMADA Chisato
 多摩美術大学大学院日本画科修了、1987 TAMA VIVANT (東京)、1989 日本インパクトアートナウ(ソウル)、2006 福島現代美術ヴィエンナーレ、アートプログラム青梅、2007 アートクロッシング(京都)、かねこアートG1、なびす画廊、游画廊、あ〜とじよいばらば、コバヤシ画廊、アリアアートサイト(東京)、不二画廊(大阪)などで個展、その他グループ展多数、パブリックコレクション:神奈川県立近代美術館。



アート農園では新規会員を募集中です。アート農園の目的に賛同された方、興味をもたれた方は活動に参加してみませんか? 会員の種類と、現在の会費はそれぞれ下記のとおりです。
 1. 個人会員、この法人の目的に賛同し、入会した個人。・・・年間一万円
 2. 学生会員、この法人の目的に賛同し、入会した学生。・・・年間五千円
 3. 賛助会員、この法人の事業を賛助する会員。・・・個人：一口千円、一口以上 法人：一口一万円、一口以上
 入会を希望される方は、まずはホームページからメールにてご連絡ください。追って事務局の方からご連絡を差し上げます。また、お問い合わせ等もお待ちしております。 <http://www.art-nouen.jp/>